





Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. This page contains approximately 12 lines of text. The script is consistent with the previous page. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a single column on the right page of the open book.

源稿考

Handwritten text in a cursive script, enclosed within a rectangular border. The text is written in a single column on the left page of the open book.

て注をなしたるものなりしをいへば、  
なげむべし。

一本文は、今本に異なるものあり、  
れは、今本に異なるものあり、  
かゝるものあり。

湖月抄の文、今本に異なるものあり、  
を考へ、今本に異なるものあり、  
て、今本に異なるものあり、  
と、今本に異なるものあり、  
讀清濁假名

が、ひなすも、今本に異なるものあり、

一、今本に異なるものあり、  
を考へ、今本に異なるものあり、

一、今本に異なるものあり、  
あし、今本に異なるものあり、  
ひも、今本に異なるものあり、  
な、今本に異なるものあり、

一、今本に異なるものあり、  
各地の界、今本に異なるものあり、  
大、今本に異なるものあり、

種あり。

一師まよきるすも先師本居翁の諱なり

桐壺 一丁。桐壺がけみきけき文。更衣けはらふ事。帯木 空蟬 夕顔 日丁。夕顔 彈君けみき

源氏君がけき事。若菜 二丁。源氏君が文。あまきみけき事。源氏君がけき

未摘花 五丁。源氏の紅葉賀 四丁。源氏のきみけき文。藤壺中より

花宴 葵 日丁。源内侍けき。げんがし君がけき。六葉清息

花散尾 日丁。源氏君がけき。源氏君がけき。源氏君が文。同君が文

須磨 八丁。源氏君が文。わがし君が文。王命婦及事。げんがし君がけき

明石 十一丁。紫上清文。源氏君が文。臘月夜けきみけき事

零標 十四丁。源氏君が文。明石 蓬生

紫けしへの清かりと。源氏君がけき

関屋

十五丁。源氏君清文。空蟬君清文。

繪合

松風

二十丁。源氏君清文。

薄雲

十五丁。明

櫻

源氏君清文。

少女

源氏君清文。

玉鬘

源氏君清文。

胡蝶

源氏君清文。

初音

源氏君清文。

胡蝶

源氏君清文。

螢

源氏君清文。

常夏

源氏君清文。

冊火

源氏君清文。

野分

源氏君清文。

御束

源氏君清文。

藤袴

源氏君清文。

真木柱

源氏君清文。

藤裏葉

源氏君清文。

梅枝

源氏君清文。

若菜

源氏君清文。

上

源氏君清文。

柏木

源氏君清文。

御法

源氏君清文。

同下

源氏君清文。

朧月夜

源氏君清文。

柏木

源氏君清文。

横笛

源氏君清文。

新虫

源氏君清文。

夕霧

源氏君清文。

御法

源氏君清文。

幻

源氏君清文。

白雲

源氏君清文。

红梅

源氏君清文。

竹川

源氏君清文。

橋姫

源氏君清文。

推本

源氏君清文。

早世

源氏君清文。

宿木

源氏君清文。

總角

源氏君清文。

東屋

源氏君清文。

御法

源氏君清文。

御束

源氏君清文。

御法

源氏君清文。

御法

源氏君清文。





Ugaleone  
i. e. m. d. m. d.  
m. m. m. m. m. m.  
m. m. m. m. m. m.

更衣社母弟のりり  
日十三丁才  
アケガの西の山に  
空蟬  
源氏物語

師長  
m. m. m. m. m. m.  
m. m. m. m. m. m.  
m. m. m. m. m. m.

源氏  
茶廿五丁  
源氏物語

Handwritten text at the top of the right page.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text on the right page, including a line that appears to be a signature or name.

尼君降 (Nijun no furu) - A specific name or title written in the text.

Bottom section of handwritten text on the right page, including a line that appears to be a signature or name.

Small handwritten notes or corrections at the top of the right page.

Handwritten text at the top of the left page.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text on the left page, including a line that appears to be a signature or name.

Bottom section of handwritten text on the left page, including a line that appears to be a signature or name.

又 (Mata) - A particle used at the beginning of a sentence or clause.

Small handwritten notes or corrections at the bottom of the left page.

Bottom section of handwritten text on the left page, including a line that appears to be a signature or name.

Small handwritten notes or corrections at the top of the left page.

舟がしるぬけのりへんが  
日廿四丁才

少納言が及びし

後文に尾君は遠くをりて  
お納言のりへんが

中をぬるまじけなをすし  
上月

山寺にまゐりわしるが  
礼

こまよりまじせま  
礼

小山僧坊

尾君のくまのりへんが  
尾君のりへんが

たらぬる月廿廿のれが  
日廿五丁才

まゐりてせり  
道

うへはせま  
さく山寺にま  
り渡り海に  
てははりへん  
けしへん  
しへん  
しへん

源氏忠

院村にまじれ試案に音海波とまじりて  
昔はまじりて

いへんが  
日三丁才

まじりて  
日四丁才

へんが  
日四丁才

藤臺中へ

いへんが  
日四丁才

まじりて  
日四丁才

又源氏忠

よるに  
日十七丁才

司宿に  
子に  
まじりて

わらわのほろこ  
ひらきぬら  
あはれなるは  
おもひ

花いさの心や思ひもつゝもつゝもまきせ侍りどあり。

源内侍 此二首の消息の事。  
し長けまきせ侍り

日廿六丁ウ

うらまをいさのひだりまきせ侍りどあり  
のづかにいさあははらまきせ侍り

頭中ぬ

日廿九丁ウ

君にこそいさのひだりまきせ侍りどあり  
のづかにいさあははらまきせ侍り

源内侍 源内侍と源内侍と  
はらまきせ侍り

葵十三丁ウ

ほのやちのひだりまきせ侍りどあり

はまらけのひだりまきせ侍り

源内君六条の見所 葵十三丁ウ  
源内君六条の見所

日廿六丁ウ 源内君六条の見所

源内君六条の見所 源内君六条の見所

袖ぬらまきせ侍り

源内君六条の見所 源内君六条の見所

又源内君六条の

袖ぬらまきせ侍り

源内君六条の見所 源内君六条の見所

源内君六条の  
見所



まじりて  
もをせむ

はら〜

秋まにちたれまじりぬ〜

源氏忠 秋好斎にありまじり伊勢に

神九才 口にはやま可群に前より中村の神事ゆゑ  
のけりまじり〜

八海あるに神をあらぬ別社中城

中りまじりあ〜

同 忍 二三日を女院のまじりて

同 三十一 マのまじり

〜

ま〜

がみに〜

供らふれあ〜

同 忍 権は丹院社女房に言本院

〜

〜

〜

〜

〜



あまの志のなる御魂もあづから秋の雨や  
かぶるわのうらみきりてのねがめはかきあはせ  
し時とていづれあはれあひにけり。

同 足 野月夜故すま 領十五下 時をばけりてとてあはれあひにけり

とせ終るをいづれに思ひぬあづから 今世は  
田るあはれあひにけりてとてあはれあひにけり  
にこそあはれあひにけり。

あまの志のなる御魂もあづから秋の雨や  
かぶるわのうらみきりてのねがめはかきあはせ  
し時とていづれあはれあひにけり。

同 足 野月夜故すま 領十五下 時をばけりてとてあはれあひにけり

あまの志のなる御魂もあづから秋の雨や  
かぶるわのうらみきりてのねがめはかきあはせ  
し時とていづれあはれあひにけり。

王命婦がしりて 東よれば侍とていづれ

あまの志のなる御魂もあづから秋の雨や  
かぶるわのうらみきりてのねがめはかきあはせ  
し時とていづれあはれあひにけり。



けのり

~~~~~

~~~~~

~~~~~

同

~~~~~

~~~~~

~~~~~

同

刻まじりぬ  
ちきりけり  
ぬきぬきぬき  
たぬき

~~~~~

~~~~~

~~~~~

薄雲女院

~~~~~

~~~~~

朧月夜君

~~~~~

~~~~~

六条清息所

六条清息所 清息所 清息所 清息所

日廿六丁九 源氏虎運故

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

源氏虎運故

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...

あはれ...







向くは...  
 城の...  
 はの...  
 変が...

源氏

源氏...  
 源氏...

降み...  
 同...

同...

一...

わ...  
 の...  
 一...

空輝

逢...  
 わ...

明石

明石...  
 よ...

おのれも侍と申すは業上り侍  
おのれも侍と申すは業上り侍  
おのれも侍と申すは業上り侍  
おのれも侍と申すは業上り侍  
おのれも侍と申すは業上り侍

源氏と申すは業上り侍

源氏と申すは業上り侍

おのれも侍と申すは業上り侍  
おのれも侍と申すは業上り侍  
おのれも侍と申すは業上り侍  
おのれも侍と申すは業上り侍  
おのれも侍と申すは業上り侍

源氏と申すは業上り侍  
源氏と申すは業上り侍  
源氏と申すは業上り侍  
源氏と申すは業上り侍  
源氏と申すは業上り侍

源氏と申すは業上り侍  
源氏と申すは業上り侍  
源氏と申すは業上り侍  
源氏と申すは業上り侍  
源氏と申すは業上り侍

源氏と申すは業上り侍

源氏と申すは業上り侍

かたきつに流れぬ水もよしのつとみみちをたづねては流るる  
權舟院跡ありて

あがきもよきつにゆきよにそはなをたづねては  
ほいせはほいせのぼるあき

源氏はらげ はらげ  
あき

あがきもよきつにゆきよにそはなをたづねては

木橋はらげ はらげ  
あき

あがきもよきつにゆきよにそはなをたづねては

源氏はらげ はらげ

あがきもよきつにゆきよにそはなをたづねては

明石はらげ はらげ

あがきもよきつにゆきよにそはなをたづねては

秋好はらげ はらげ

あがきもよきつにゆきよにそはなをたづねては





幸々三十三  
 山王の御代  
 乙未の年  
 のついでに入る事  
 此の御代  
 乙未の年  
 のついでに入る事  
 此の御代

幸々三十三  
 山王の御代  
 乙未の年  
 のついでに入る事  
 此の御代  
 乙未の年  
 のついでに入る事  
 此の御代  
 乙未の年  
 のついでに入る事  
 此の御代

幸々三十三  
 山王の御代  
 乙未の年  
 のついでに入る事  
 此の御代

幸々三十三  
 山王の御代  
 乙未の年  
 のついでに入る事  
 此の御代  
 乙未の年  
 のついでに入る事  
 此の御代  
 乙未の年  
 のついでに入る事  
 此の御代

源氏

行六十一  
 幸々三十三  
 山王の御代  
 乙未の年  
 のついでに入る事  
 此の御代

云のぼるは足降のまゝ

昨日

光がをりたがりのまゝのまゝのまゝ

大文 大文のまゝ

六條村 六條村のまゝ

一ヶの侍をいふ 一ヶの侍をいふ

をあるいふ をあるいふ

あつた あつた

あつた あつた

あつた あつた

あつた あつた

あつた あつた

あつた あつた

あつた あつた

あつた あつた

あつた あつた

あつた あつた

日廿三十一  
 あしせしむるはむらさき  
あしせしむるはむらさき  
 のしほのりあはむらさき  
あしせしむるはむらさき  
 ちのあはむらさき  
あしせしむるはむらさき  
 なる。まのりあはむらさき  
あしせしむるはむらさき  
 ちのあはむらさき

吾方いさうなまはむらさき  
 源氏忠勝あつらふ

日廿四十一  
 あしせしむるはむらさき  
あしせしむるはむらさき  
 ちのあはむらさき

のしほのりあはむらさき

源氏忠勝  
かろしけんをけりて

日廿五十一  
 あしせしむるはむらさき

のしほのりあはむらさき

兵部少輔  
上に様

日廿六十一  
 あしせしむるはむらさき

のしほのりあはむらさき

日廿七十一  
 あしせしむるはむらさき

のしほのりあはむらさき

算見大将

あつたは四方へいりし事なりける事あり

辰千子才

小方共は酒宴のちしり酒は縁にこころあり

よびにののにきしりし侍用の書はしり  
色かきしりし侍用の身はしり  
色かきしりし侍用の身はしり  
色かきしりし侍用の身はしり

兵部文

おきしりしは黒黒は四方に走り  
おひて後にはしりしりしり

あつたは四方へいりし事なりける事あり  
あつたは四方へいりし事なりける事あり  
あつたは四方へいりし事なりける事あり

なつたは四方へいりし事なりける事あり

源氏

あつたは四方へいりし事なりける事あり

辰千子才

あつたは四方へいりし事なりける事あり  
あつたは四方へいりし事なりける事あり  
あつたは四方へいりし事なりける事あり

辰千子才

あつたは四方へいりし事なりける事あり  
あつたは四方へいりし事なりける事あり  
あつたは四方へいりし事なりける事あり

あたまより。

又源氏名より

日世下ウ  
 木下作の月日をかきりぬるはたの  
 けいさくしつ  
 りひさしはたしあふるしつ待たぬしつ  
 日世下ウ  
 でゆてき射西はしつてきんちん  
 ひたしつあふるしつあふるしつ  
 なたしつあふるしつあふるしつ  
 しつあふるしつあふるしつ

田下作の月日  
 あたまより  
 木下作の月日  
 けいさくしつ  
 りひさしはたしあふるしつ

日世下ウ  
 木下作の月日

又源氏名より  
 日世下ウ

木下作の月日  
 けいさくしつ  
 りひさしはたしあふるしつ  
 日世下ウ  
 でゆてき射西はしつてきんちん  
 ひたしつあふるしつあふるしつ  
 なたしつあふるしつあふるしつ  
 しつあふるしつあふるしつ  
 日世下ウ  
 木下作の月日  
 けいさくしつ  
 りひさしはたしあふるしつ  
 日世下ウ  
 でゆてき射西はしつてきんちん  
 ひたしつあふるしつあふるしつ  
 なたしつあふるしつあふるしつ  
 しつあふるしつあふるしつ

裏四丁才  
 日世下ウ  
 木下作の月日

吾宿の心だかたふまなうのこころをさかぬ御侍の心

夕暮の心 二葉井ノ城のこれ多ひての

日十二丁 上はすし一宮井のほとさうりし けしき こころをさかぬ御侍の心

みけがとけきふらぬらにまじりて かたがたのこころをさかぬ御侍の心

かたがたのこころをさかぬ御侍の心 かたがたのこころをさかぬ御侍の心

同 惟光の娘茶屋侍あり、奈はつらひにいとたのめにかやうひ

日十六丁 たしこまきし けしき かたがたのこころをさかぬ御侍の心

あはれ かたがたのこころをさかぬ御侍の心

後内侍のこころ

日十七 かたがたのこころをさかぬ御侍の心

かたがたのこころをさかぬ御侍の心 かたがたのこころをさかぬ御侍の心

源氏 女三葉一まわいせ

日十八 かたがたのこころをさかぬ御侍の心

かたがたのこころをさかぬ御侍の心 かたがたのこころをさかぬ御侍の心

朱雀院 惟光のこころをさかぬ御侍の心

日十九 かたがたのこころをさかぬ御侍の心

かたがたのこころをさかぬ御侍の心 かたがたのこころをさかぬ御侍の心

日二十 かたがたのこころをさかぬ御侍の心

師五時六拍をよ  
くまきつたの  
君くまきつたの  
こころをさかぬ御侍の心  
同のこころ

つむよに世にいづるふり入の跡に...  
けし...  
あり。

明石入道

明石上にまの...  
遺言は...

同七十九才  
こけ...  
あけ...  
念佛...  
息...

うこ...  
まに...  
あ...  
く...  
え...  
お...  
あ...  
ね...  
ね...  
ね...



<sup>須弥山</sup> 山は右に海にさげきり山は左に月  
 日たひのりちかひのちかひいづ世はてすはけの  
 らき山は一えむのげむのむむうけひのりにあ  
 らび山をさひるま海やうのつむまうちまむ舟  
 へののく西はいづかしていづかして侍  
 女にぬくまぬのいづかぬ身にむすむと  
 ころ出来あつていづかしていづかして  
 きことかきあつていづかしていづかして侍り  
 哉がけはよりけしむれ終ひま、あつていづか  
<sup>明石上</sup> <sup>備書</sup>

けふも試見侍りしに是す内<sup>候</sup>教れらる試見不  
 中にえ多試見すまこと多く侍りしにむすむ七  
 さやうもつららにえのりしに多く思ひつづま  
 たりしにむすむのりしにむすむ身にむすむのり  
 てなんの道におよぶ侍りしに又もれ國乃  
 ころにけしむ侍りて老れむもむすむにむすむしと  
 思ひもむすむにけしむにむすむ侍りしにむすむのり  
 哉もけむもむすむのりしにむすむ侍りしにむすむのり  
 とけもむすむのりしにむすむ侍りしにむすむのり

明石上を

リ委身に毎衣の半のり

近中の中をすく掃掃中にいづかして

明石上

水草まよまよ  
 相尋に玄賓僧  
 正山入時の一

らに思ひれど時にあはれし若き國々を  
 頼りたるにむかひなりたるとしそしめ  
 清社をけりしはのりもなきに何事成らう  
 たひ侍に此ひらけたりとらちのき世の段  
 侍ぬまひばりい西たつ十万位に國々  
 たる五品けりけりけりといひまぐ威侍りぬ  
 きも今なきとむらばらま成るらるるに  
 うれゆりて水草まよまよ山に木にけりぬ  
 侍りぬとむらばらむらりぬ。

とら回水草まよ  
 よままはけりけり  
 の肉にすままま  
 うらまうままま  
 うらまうままま

ひらりいど暖らうかひり今がみよれまが  
 ありするま月日のまたり命をけり月日えさ  
 らにありありありありありありありありあり  
 変化のりけと見え一り老法妙れりあまの切  
 段をにありけへばよれきり一りたりてえむ世  
 代わすきけりありありありありありありあり  
 ありありありありありありありありありあり  
 ありありありありありありありありありあり  
 ありありありありありありありありありあり  
 ありありありありありありありありありあり

の社に奉<sup>箱</sup>はる<sup>封</sup>。元とて是代。大ま<sup>箱</sup>の<sup>封</sup>。ち<sup>箱</sup>人<sup>封</sup>は<sup>封</sup>。
 ば<sup>箱</sup>に<sup>封</sup>よ<sup>封</sup>ん<sup>封</sup>。と<sup>箱</sup>あ<sup>封</sup>く<sup>封</sup>き<sup>封</sup>り<sup>封</sup>き<sup>封</sup>り<sup>封</sup>あ<sup>封</sup>る<sup>封</sup>よ<sup>封</sup>。
 こ<sup>箱</sup>に<sup>封</sup>に<sup>封</sup>え<sup>封</sup>り<sup>封</sup>す<sup>封</sup>。た<sup>箱</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>月<sup>封</sup>廿<sup>封</sup>四<sup>封</sup>日<sup>封</sup>よ<sup>封</sup>。
 草<sup>箱</sup>の<sup>封</sup>い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>つ<sup>封</sup>。は<sup>箱</sup>な<sup>封</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>入<sup>封</sup>。
 り<sup>箱</sup>あ<sup>封</sup>る<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>身<sup>封</sup>。は<sup>箱</sup>な<sup>封</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。
 侍<sup>箱</sup>り<sup>封</sup>あ<sup>封</sup>る<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。は<sup>箱</sup>な<sup>封</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。
 世<sup>箱</sup>に<sup>封</sup>あ<sup>封</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。出<sup>封</sup>た<sup>封</sup>。ま<sup>封</sup>つ<sup>封</sup>。あ<sup>封</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。
 た<sup>箱</sup>い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。あ<sup>封</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。

柏木忍

女ニまをばめて見なすよは小  
侍後がやりにあきりむけは女

一日のせにま<sup>箱</sup>つ<sup>封</sup>は<sup>箱</sup>な<sup>封</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。
 ぶ<sup>箱</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。
 あ<sup>箱</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。
 よ<sup>箱</sup>に<sup>封</sup>あ<sup>封</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。
 小侍後がかりこ<sup>箱</sup>。
 一<sup>箱</sup>は<sup>封</sup>な<sup>封</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。
 あ<sup>箱</sup>ら<sup>封</sup>し<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。
 の<sup>箱</sup>け<sup>封</sup>。い<sup>封</sup>ち<sup>封</sup>の<sup>封</sup>ま<sup>封</sup>。

正保

今きれた文小あしやう山ざくらあよむぬ枝まこく  
ろのけおと。ひもまといふとあり。

源氏忠

臘月夜の尾に茶室より

百二十九下  
あふたのをさうにまのあやす其浦よりほれ  
しと誰あうたうにまの世れまあま  
ふみたりひけめく今まてなままこぬ  
をいそ然えいすはままらるる此に  
わうらにまらばらばとあはまにま  
くまこらり

臘月夜急流あり

百三十一  
けいけいよと身ひまはれ侍り  
ねんぬまはなむ  
あまがほに  
いせ  
いづれあり

朱雀院

女三十三

百九十六下  
わがつらぬて  
けい  
念

あふたのをさうにまのあやす其浦よりほれ  
しと誰あうたうにまの世れまあま  
ふみたりひけめく今まてなままこぬ  
をいそ然えいすはままらるる此に  
わうらにまらばらばとあはまにま  
くまこらり

誦  
新けいづくにえ思ひやらもまへ  
世ホ  
くわはすけふのこあつて思ひすぐち  
源氏六の公の御時  
うらやまのこころも  
能く  
のほろほろのあつて  
あつて

柏木 女三文降  
病 女三文降  
今もよりのありに侍  
らぶ  
に

とくも侍れま  
あつて

はまは  
て人  
侍

女三文降  
は

柏木此病を  
しつ八圃食  
いぞん  
四品もあつ

目録はつた  
しやう

まよひのちかぢき  
けつりふにた  
しげき

又柏木君より 未明かき

ひのけさう  
たから  
せむし  
せむし  
せむし

は増養文とあ  
はま

目録はつた  
しやう

朱雀院  
冷泉院  
夕暮忠

夕暮忠 落葉文

月をすくくたか  
 一たぐんおやうり  
 るあつおまをい  
 たり

吾上人カ

五一ひびしはるまを油にふらぬかへん音の  
 らまははるまのわらわらまをのびの  
 たぐひありたりと因ひあひよまをなかり方  
 あづろいん

又白忍より

あきまのしんじんたが成をりあははら  
 中いひひあふもほよまをいんあは  
 せんかふ流くが人止河津をのまをた各をいんあは  
 落葉文部母清息所降うり

居聖方にしり

たけりげあふりにて侍るあひひまわらひ  
 をりあふりたけりげあふりにて侍るあひひまわらひ

ぬままはらぶのあめまをいんあは  
 女郎花をいんあは

夕暮る思侍り

いとあふりしきあふりしきあふりしき  
 いとあふりしきあふりしきあふりしき

秋桂の草けげまわらひ借寐たるら

師云...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...

朱雀院

...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

雲井雁

...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...





はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。

夕暮君 夕暮君の御名

みはりのしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。

藏人少将 藏人少将の御名

今も、はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。

はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。

よはたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。

姉姫 姉姫の御名

はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。

又藏人少将 又藏人少将の御名

はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。

はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。はたしものしりあしりやどに。



故柏木忍沛女

あて年々〜并の〜  
の〜大〜

故面か

痛者  
い  
田  
お  
ら  
の  
お

た  
一  
ま  
な

い  
か  
が

白文

杖  
竹

推  
山  
一  
下  
野

は  
つ  
世  
推

ハミテウリ

上回  
城の花はさうりに山のげれ植根成ぬ妻  
れ旅人野成わたり一葉さよたのげらう  
らうらうかきあがり。

白文  
一れがらうらうたはさう。

口廿三下才  
城のゆく村山田のいんはまきいあはら  
ゆゆふさだ今のをけしむ成たがあぬ  
ほあんまあるからげらうあはら(口廿四)  
口廿四下才  
いんはまきいあはら

世はさうり  
新を明すべし  
いんはまきい  
あはら

口廿四下才  
回心  
いんはまきいあはら

あはまきいあはら  
いんはまきいあはら  
いんはまきいあはら

口廿九下才  
薰丸  
大なるけれまきい

いんはまきいあはら  
いんはまきいあはら  
いんはまきいあはら  
侍人

大臣師

口廿  
父まは眼をぬきてそのけらあはら  
今さうあはらすて侍りいんはまきいあはら

かこし侍りしをなむすめ

のさるれん 白くまの下の...  
三の根大なる...

よもあんと思ひま... 大男の...

あしあはれをせにた... 雑 伎

今ねい... 今ねい...

おろたるげは侍り... 足合て...

あすは侍る。

あざり 本年...  
四カ...

早三ツウ

あはれもあつて何... 早三ツウ

いりききゆの解... 大入...

ひもあはれ... 合

えあす... 合

あつ... 合

けつ... 合

あわ... 合

あはれ... 合

あはれ... 合

とあり。

落葉文 (Falling Leaves) 侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

中 (Middle)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

あはれらるる。侍 (侍従) 侍 (侍従)

Handwritten notes at the top of the page, including the word "Handwritten" and other illegible characters.

Handwritten Japanese text in cursive style, starting with "日二十一" and continuing with several lines of text.

回

Handwritten text below the section header "回", possibly a title or a specific reference.

Main body of handwritten Japanese text on the right page, continuing from the previous page.

Handwritten notes at the top of the page, including the word "Handwritten" and other illegible characters.

Handwritten Japanese text in cursive style, starting with "侍" and continuing with several lines of text.

中

Main body of handwritten Japanese text on the left page, continuing from the previous page.

Handwritten notes at the top of the page, including the word "Handwritten" and other illegible characters.



予が

書陸分水方

中と北四方は信をたてし

東十五下

待てし

中と北四方は信をたてし

し

し

し

し

し

し

は

大浦より

かきし作を

し

し

し

常陸分

保母村母

し

し

し

浮舟君は、  
浮舟君の舟に舟に浮くは  
 此舟が此舟の舟に舟に浮くは  
 浮舟君は、  
浮舟君の舟に舟に浮くは  
 此舟が此舟の舟に舟に浮くは

浮舟君は、

浮舟君は、

浮舟君は、

浮舟君は、

浮舟君は、

浮舟君は、

浮舟君は、  
浮舟君の舟に舟に浮くは  
 此舟が此舟の舟に舟に浮くは  
 浮舟君は、  
浮舟君の舟に舟に浮くは  
 此舟が此舟の舟に舟に浮くは  
 浮舟君は、  
浮舟君の舟に舟に浮くは  
 此舟が此舟の舟に舟に浮くは

浮舟君は、

浮舟君は、  
浮舟君の舟に舟に浮くは  
 此舟が此舟の舟に舟に浮くは  
 浮舟君は、  
浮舟君の舟に舟に浮くは  
 此舟が此舟の舟に舟に浮くは  
 浮舟君は、  
浮舟君の舟に舟に浮くは  
 此舟が此舟の舟に舟に浮くは  
 浮舟君は、  
浮舟君の舟に舟に浮くは  
 此舟が此舟の舟に舟に浮くは  
 浮舟君は、  
浮舟君の舟に舟に浮くは  
 此舟が此舟の舟に舟に浮くは

此の歌の意は...

浮舟者 年長ゆへに御柱をえられたる古君のまじわらせま

ねむる 浮二ツサ 甚ハニクニシテ

の歌

かゝる 中略

あはれ

右近 田嶋の歌

あはれ 上

師 人ハ詩ノ文也

此の歌の意は... 浮舟者... ねむる... かゝる... あはれ... 右近... あはれ...

回 母の石山に...  
を其人ども成るる...  
母の石山の...

四廿一  
よびのけいせいのせけひて...  
ながらびの...  
か...  
ま...  
ま...  
ま...

大文部 復 先明石中...

日廿八...  
お丹のねが...  
あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...

藤原公全物語に  
明も奉の重は  
ましまし有は  
まはらまら  
るは況玉小梅に  
せり。

浮舟君

白くはなむらぎ

日四十五才

のこまきしはまかめなつたあまきりては  
ふなやまのなつたあまきりては

云

ふなやまのなつたあまきりては

日五十二才  
ふなやまのなつたあまきりては  
ふなやまのなつたあまきりては  
ふなやまのなつたあまきりては  
ふなやまのなつたあまきりては

句文

白くはなむらぎ

のこまきしはまかめなつたあまきりては

ふなやまのなつたあまきりては

白くはなむらぎ

のこまきしはまかめなつたあまきりては

ふなやまのなつたあまきりては

白

白くはなむらぎ

のこまきしはまかめなつたあまきりては

ふなやまのなつたあまきりては

ふなやまのなつたあまきりては

浮舟けし

浮舟のし

浮舟けし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

まき...  
ゆかり...  
に...  
り...  
こ...

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

浮舟のし 浮舟のし 浮舟のし

すめんにあらたまはるるむらむら THE BRICKS  
らむらむらむらむらむらむらむらむら THE BRICKS  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら THE BRICKS  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら THE BRICKS  
あり。

むらむらむらむらむらむらむらむらむら THE BRICKS  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら THE BRICKS  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら THE BRICKS  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら THE BRICKS  
あり。

豊 治大めいふらり後  
其おもはるゝひはるゝ

ありありありありありありありありあり THE BRICKS  
ありありありありありありありありあり THE BRICKS  
ありありありありありありありありあり THE BRICKS  
ありありありありありありありありあり THE BRICKS  
ありありありありありありありありあり THE BRICKS

浮舟 のうきふね

侍の<sup>御</sup>役成トコノツマシキに  
 へり侍るにトコノツマシキに  
 にかつんトコノツマシキに  
 まくトコノツマシキに  
 にトコノツマシキに  
 未だトコノツマシキに  
 見たトコノツマシキに  
 のトコノツマシキに  
 うらトコノツマシキに

たトコノツマシキに  
 侍トコノツマシキに  
 河トコノツマシキに  
 せトコノツマシキに

小亭相トコノツマシキに

あトコノツマシキに  
 とトコノツマシキに

小野尾トコノツマシキに

なトコノツマシキに  
 てトコノツマシキに

後撰「Innovis」  
 紅紙  
 本  
 也

千十トコノツマシキに

今日トコノツマシキに



ちうなるものわらわらあまのい  
あまのい  
あまのい  
あまのい

同尼君

中將より手習にん尼にけりてあまのい

あまのい  
あまのい  
あまのい

あまのい  
あまのい  
あまのい

中將

小野尼君のいひの君の

あまのい  
あまのい  
あまのい

あまのい  
あまのい  
あまのい

あまのい  
あまのい  
あまのい

尼君れりりり

あまのい  
あまのい  
あまのい

あまのい  
あまのい  
あまのい

あまのい  
あまのい  
あまのい

小野僧都

手習君けりて大和殿にけりてあまのい

手習君をやら家  
せにやうてあがき  
ゆくまうい迷ひせ  
一とごあまめい  
い無益なること  
目下は法師の入体  
て家せしむるの  
切後あまに星  
うつてのそと手習  
いふまじり思ふた  
たよりてい

第十三丁オ

よへ大將殿に使はく手習君の弟おとよとやまがらり

ししけらけあはりいあらまぬく手習君てた

侍もあまと娘息におらあまげの娘君おと

さぶきこまねかのみまげあすこく

さあぬぐー

回一入浮舟入

けさくに大將殿にの日吉まひくはありま

けいひひ新あまげあがりあうあまあま

え侍りぬあままぎあうこけるあまあま

あひくあやあま山賤あまのあまたあま

のあまを傳あまたあまああまああまああまああま

げり驚あまお侍あまのあまああまああまああまああま

まらああまああまああまああまああまああまああま

し目あまたあまけあまのあまああまああまああまああま

ああまああまああまああまああまああまああま

ああまああまああまああまああまああまああま

ああまああまああまああまああまああまああま

吾れは〜  
師云々〜  
わが〜  
〜  
〜  
〜

そは傍りおのひの〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

源氏君  
未拾五君にぞ。めであひぬ。

夕雲の〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

冷泉院  
秋の比原氏君の奈并に桂院まをば。

月が世に〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

夕雲方君  
海葉方中夕雲方君の。

夕日十六丁ウ  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

大坂の山の人  
やだつたまの

大坂の山の人  
やだつたまの  
○源氏君より以下  
まぢく見たるたまの

小坂の卒

大坂書林

宣英堂板

必齋橋通南久寶寺町北入

大坂書林

伊丹屋善兵衛

